臺灣新民報 日刊 第一方四千三百十七號 昭和十五年一月二十三日（火曜日） （第二版）（物品郵便物認可）（郵便物認可）

歷史的青島會談

明日から約一週間

【青島二十一日發同盟】支那新中央政府樹立の大綱を決定すべき汪精衛、王克敏、梁鴻志、王揖唐、陳羣、王子惠、梁鴻志の三巨頭の歷史的會談は愈二十二日より約一週間に亘り青島迎賓館に開催されることになり重慶中國國民黨中央執行委員會常務委員周佛海、同候補委員梅思平、同常務委員兼秘書長陳春圃、中央政治委員會委員兼內政部長陳羣、內政部次長伊藤述史、司法部總長朱深、同部次長高冠吾、維新政府側立法院長王揖唐、考試院長王子惠、同副院長梁鴻志、同秘書

南支戰線のお正月 ㊤前線の勇士達の手で作られた門松 ㊦急造のテーブルでピンポンに興ずる〇〇隊の勇士

壯烈な戰死を遂げた 川田指導官夫妻とその部下

退却した敵を追撃中 部下の手榴彈に

【廣東本社支局特電】去る十三日午前十時から市内愛東路の經濟局司令部では何應欽軍事委員會委員長となつて故川田指導官と並に八十代つこう夫人とその部下佐の殉職者合同慰靈祭が日獨官民を擧げ盛大に行はれ何應欽委員長と川田指導官夫人を始め生前川田指導官と親交深かつた獨逸人顧問團、軍事顧問團、軍官學校教官團、廣東市内各機關代表者等多數參列して嚴かに擧行された。

その死を悼まれた川田指導官は山形縣の人今年二十九歳の壯國の士で八千代夫人は昨冬二十一日廣島から迎へた許りの人であつた氏は經濟部軍事顧問團第七區の責任者として第一回北伐に部下十名の戰死者を出すや之を悼み遺族に對し金二萬弗の弔慰金と共に勳章を贈つて其の勇士的な最期が傳へられるや國民政府は明日（廿六日）の初日が拜めるとい十二月二十一日午前零時頃良田飛の總指揮部は突如團長を呼び大團長室に集合を命じ左の如く訓示があつた。

一、敵は我が軍の包圍を脫して逃走を企圖し現在地點より東方に向つて山中を脫れた、斯くして敵殘兵に對しては各個に擊破を繼續すること。

二、定數八個連隊の件（省略）

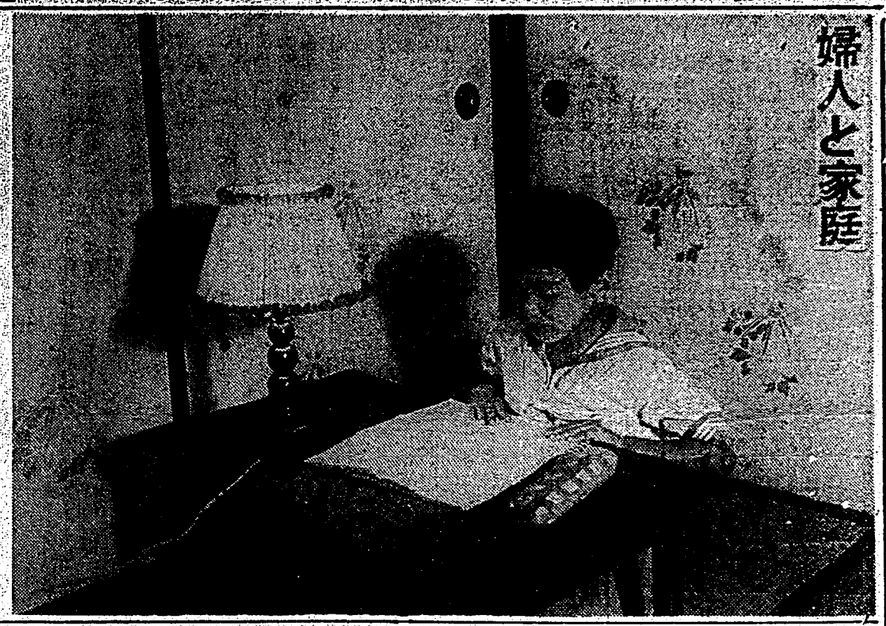
三、所在部隊に關する件

四、部隊長は本夜半より出發すること。

五、分隊長以下は各自攜帶品を整理すること。

六、出發時間は午後十時三十分とす。

右訓示後團長良田飛は部下將兵に對し「今回の戰鬪は實に困難を極めたが諸君の勇敢なる戰鬪振りは實に感謝に堪へない、諸君の勇敢なる戰鬪振りは必ず後輩の手で果たす事と信ずる」と述べて後を托させ川田指導官夫妻と部下の靈柩は以て後世に遺すに足りこの際は



婦人と家庭

交際費を極度に減らせ
修養費は増加させたい
岸田軒造

うるほひを與へ、公衆を醫療して貰ふので、どうしても缺くことの出來ないものでありますが、それにしても、なるべく少い經費で多く樂しみ得る方法を考へるのが當明なことです。一般に國民各個に於ては、各家庭が共に樂しむ家庭娯樂が多いのです、殊に日本に於ては各家庭が乏しい、自然に娯樂を家の外に求めるのです、外に求める娯樂は金がかゝり、しかも衛生的ひやすいのです、家の中でやる娯樂は金が少くて衛生がありません、日本の家庭もモット家庭娯樂を發展する樣に考へることが大切です、經濟上の利益よりも、家族教育上得る所が大きい。

蛔蟲を驅除せよ
惡性のものは肺まで犯す

國民體位の向上、保健衛生に關する問題に關係深き醫學本務に乘出して來たために、益々實踐を重けてゐますが、特に本年は寄生蟲、蛔虫驅除の問題について一段とその驅虫が進められることと思はれます、昨年は結核豫防運動が擧くも皇太子殿下の御誕生の聖慈に關して、それが、ある人達の無理で生命をとられたといふやうな噂がありさへあります、これは醫師がひどいがその原因がわからず、また誤診しての手落のうちに數中にはびこりかたまつてゐた蛔蟲のため、急に生命を奪はれたといふわけでそれにわき易い醫の方とは特に一定の度をとり、一定の日數に一定の藥を與へて驅虫するやうに定められてゐます。

×　×

さて、他の寄生蟲に對しては隨分神經過敏のやうに、蛔蟲に對しては一向に無關心なのは正しく文明人の恥ですが、よくあることで、何故かといふに、蛔蟲は寄生蟲中最も古代から知られてゐるし、世界的に擴布されてゐるのと、驅虫の方法も比較的容易であるからです。

蛔蟲は古代から

寄生蟲の中で最も世界的に擴布されてゐるのが蛔蟲で、歐洲では紀元前五千年頃から知られてゐるし、支那では紀元前二千七百年頃から知られてゐます。

次に、家計の中で支出の「馬鹿」ならぬ交際費ですが、これは極度に減らしたいものです。嘉慶、生活難が全國的に深刻さられ、消費節約、無駄廢除が叫ばれてゐるのは、社交機關の改善、交際費の無駄廢除でした、近頃都會の飲食店が大分閉店したり、改善團體改善指導といふことが相當行はれるやうになつたので、今後交際費は、從來より大分節減されることと思ひますが、都會地方どでは、依然として從來と大差ない無駄をやつてゐる無自覺の人々が決して少くないと思ひます、交際費の節減はただ節るのみですそれを有力義ふことを斷行するのに少しの躊躇もいらぬと思ひます。

◇

次に、儀禮、慶弔費ですが、慶弔費は、現在の一般の實情は、むしろ少た過ぎるかと思はれます、殊に絶對をみると歐米の慶弔費は非常に少いのです、今後外の費用を大に節約して、慶弔費を相當增加する餘に苦るといふ事はないものであります。

慶弔費は、今後益々增加して行くかと思はれます、慶弔は人生に

ありません、かうした時は、種々の醫療が起すばかりでなく、それこそ生命を奪はれます

心臟・肺へ侵入

日本でかつて關東震災を病んだ台灣人の中から實に蛔蟲が二千九十七匹出たといふ例もあり、二百や三百の腹の中に飼つてゐる人は珍らしくないのです、何としても我國には衛生上の缺點として田畑に糞尿を肥料として施用するので、野菜に蛔蟲の卵がくつついて居る事が多い訳です、野菜にくつついた卵は固い殻をかむつて時の到來をそのまゝ待つてゐる、一旦人の口に入ると胃や腸の中で殻を破つて幼蟲がその姿を現し、次いで腸壁を破つて腸間膜に出で、更に腸管に行き、そこから肺へまで氣管から咽喉へとやつて來ます

更に來て氣管を通つて胃から腸に來て一人前の蛔蟲になるわけです、この處へ來る時代に日外に飛び出すこともあり得るわけです

蛔蟲は熱には弱い

便所の改善や衛生肥料の方法が改善されない限りは、なか〳〵この蛔蟲を全部に驅除することは困難ですが、この蛔蟲の卵は抵抗力は強いものですが、攝氏には極めて弱く、攝氏の七十度以上ならば一秒で死ぬものですから野菜や酒物は熱湯をかけるのも驅除の一法です

一般的の驅除劑

また驅蟲劑としては、昔からある種々のマクリとサントニンも有效であり、多くの海草から誘導された製劑、例へばマクニン、ヂゲニン、アンテニン、ソーウエラン等は殆ど用もなく相當有效ですから、特に小兒は一月一度はこれらの藥をのむのが安全でせう

驅虫劑の服用法

ろいろありますが、家庭でつくれるものには、次のやうなものがあります。

芥子浴　一〇〇―二〇〇グラムのカラシ粉を布袋に入れ浴槽につるしもみ出し置き浴湯を適當に加減し攝氏の蛔蟲のうまで入浴します。皮膚疾患、腸炎、腸結核、腸潰瘍及び胃腸病の際は禁忌です。作用があり、急性下劑、驅蟲ロイマチス、毛細管擴張等に應用します。

硫黄浴　木綿袋に硫黄五〇―一〇〇グラムの硫酸加里を加へる卵、水銀中毒、脳溢血等に效果ありません。

藜浴　一―一・五キログラムの藜を水桶に入れ約五リットルの熱湯を注ぎ約二十分間煮沸し、これを濾過して、浴槽に加へます。皮膚疾患、腸炎、火傷、皮膚潰瘍等に有效です。

炭酸浴　浴槽に半ポンドのソーダを加へ攝氏四〇度に中和する。腸炎、神經衰弱、攝氏四〇度に有效です

注意することは、醫者にかゝつてゐる時は相談してからにすること、藥を飲む時、よく噛んできいて分解をたすかう、又藥人が我慢にくい藥を求められもの、は止める方がよろしく、入浴しようとするのと混ぜるには、一キログラムのカマニル形シャンプ根をリットルの熱湯中で十分煮沸して使用して浴槽に加へます。攝氏四〇度位に入浴します。

包裝及定價　三十錢入　五十錢入　一圓入　一圓六十錢入　一圓五十錢入

本店　大阪市道修町

大日本製藥株式會社　支店　東京市本町　出張所　臺北市榮町

醫學博士　鴻野　勇氏　創製
醫學博士　木下東作氏　監修

主治効能

肉體的、精神的一般疲勞　頭痛、睡眠不足に因る頭痛、スポーツの心悸亢進、息切れ、船車酔、山嵐、二日酔、宿酔、精力增進の効

疲労防止恢復薬

執務の疲れと船車よひに　Ⓟ　オフナール

ANTIPHLAMINE

腸炎感冒濕布劑

アンチフラミン

効果本位

本劑は強力。腸炎を始め各種炎症及び疼痛性疾患に卓效を有する新巴布劑で患部に塗布するや否やその有效成分が直ちに深部に滲透して消炎鎭痛作用を呈し。患部の新陳代謝を旺盛にして病症を去らしめる。婦道女の月經痛にも良效を呈する。

適應症　肺炎・腎臟・肋膜炎・ロイマチス・關節炎・筋肉炎・腹膜炎・睾丸炎・乳腺炎・耳下腺炎・蜂窩織炎

包　三〇瓦
　　六〇瓦
裝　五〇〇瓦（壹圓）

發賣元　株式會社　柳韓洋行
京城府西大門町二
大連・米國國府・臺北・天津

ビタミンA・B・C・D・G綜合滋養劑

ハリブマルト

本劑は榮養。補血。消化。淨血の各作用を有するヴイタミンA・B・C・D・・Gの綜合的滋養劑である。故に從來肝油に有り勝ちな胃腸障害の副作用なく却つて消化を助け便通を整へて榮養吸收を一層高める特長を有する。

包　三三五瓦
裝　一〇〇〇瓦

適應症　榮養障碍・貧血症・小兒發育不良・乳汁不足・腺病質・產前產後・衰弱體質・病後疾復期等

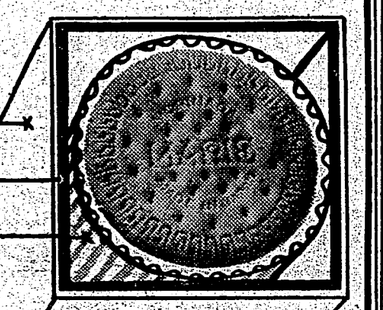
（全國有名藥局販賣）

HALIBUMALT

B—12

トツケスピ入ボーケツパ

紙包煎茶



紙袋表
ルーポ取付の引紐
ルーポンダ通り

1. 特殊なボール紙サックに塗引して外氣と遮斷してある
2. 金具を一切使用せず
3. 製品は損ぜず溫氣ず
4. 味も變らず經濟的です

一リマ永森
國品準標

珠の通共國各もてつなにも求もで處何中界世用食當い輕　トツケスピ・ドーへたつもな型と錢十五　すまり居てれさ及普に的界世てしと

るすの味醇
ーカッラクー永森
いなやちトツケスピがり買いぼとうらなに有のルーどらなれご
錢五十四　　のもい

い多の類種
スイヨチ永森
作こし有保醇のそを分養栄の料原國に能非トツケスピトフツたつ
錢十五　すまり當適るのみし

トツケスピルミのんやち高
ナンマ永森
すまれに一食もにんやも味いなの產
錢十五　錢十

トツケスピルミ永森
本木ただけ上身絶ーしやセルミ
錢十五　のもる上以が通食の

株式會社　森永商店　東京・大阪・名古屋・札幌・福岡・臺北・新京・大連・京城・釜山

下一品

萬

舌の行司に狂ひなし

油醬ンマーコッキ

野田醬油株式會社

日刊　ハイキング　コース　一册金參錢（送料共）　臺灣日日新報社

イカナル病

根切サレタ事
無料デ教ヘマス
（用紙・年齢・新聞名ヲ書キ四錢切手ヲ封入御申込下サイ）

名古屋市東區山口町四四番地
一二三堂總本家

眞珠特約店募集

眞珠養殖本場眞珠との直接取引大賣捌所
當社は創業以來信用第一主義を以て一貫し常に優良品を廉價に提供し來りましたが今回更に一層の御便宜を計る爲め特約店を募集致します
◎資格　一定の資本金と身元保證人を有し且つ當社の規定を嚴守する事
◎特典　一、當社の眞珠は總て特約店に限り卸値段にて販賣致します
二、當社の眞珠は總て特約店に限り卸値段にて販賣致します
三、當社の眞珠は總て特約店に限り卸値段にて販賣致します
◎保證金　金百圓也（但し信用ある方は無保證金にて取引致します）
◎申込方法　履歷書を添へ申込まれたし
◎其他　詳細は規定書進呈
三重縣眞珠養殖組合
三重縣眞珠販賣購買組合
三重縣眞珠商業組合
三重縣眞珠輸出組合
三重縣眞珠檢查所
三重縣眞珠養殖漁業組合
三重縣眞珠養殖業組合

馬に乗る猿

(56)

石川達三作

伊東顯畫

身邊多事（七）

古狸スフポンの年頭は早朝から電話と訪客の應接に忙殺されて、碌々朝食もとれなかつた。

「なんだ！ホルモンへやつてゐるのか、それぢや酒ばかり飲んでゐるんだらう」

「ところでね久山さん」と話を切り出した。

「あのね、もう數日のうちに出川大合同の正式調印式が出來るでね、それで酒を飲んだらぐに本社へ歸つて貰ひたいんです。明後日をたのむぜ中部地方大合同の祝賀會といふ名目でこれを大會社發展號と同じやうなみんな會社に關はりのある人達を招待しやうと思ふんだ。それで君は幹事長として會場の設備や接待の方法一切を引受けて貰ひたいんだ。場所は丸の内の東京會館がいゝだらう。會費は一人前十五圓位で、會員は約三百名位だ。それから君の方の社員は全部出席させること、それから會場の裝飾は花輪を使はずに全部鉢植にすること、それから……」

「はゝあ……」久山は興味のない顏をした。

「それだけ君に頼んでおけばいゝ。あとは社長の方でやるから」

「ほんとですかや、そんなことを言つて、あとで社長に叱られるのは僕ですからね」

「大丈夫だ、社長には僕からよく言つておく。とにかく君は會場の設備と接待の方法を研究して置いてくれ給へ」

「ぢやあ社長にもさう言つておきますがね、會場の設備費はどの位まで出すんです？」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前十五圓ぢや足りませんぜ」

「それは君の腕次第だ。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前四百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前五百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前六百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前七百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前八百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前九百九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前千九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千七十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千七十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千八十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千八十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千九十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前二千九十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千二十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千二十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千三十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千三十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千四十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千四十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千五十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千五十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千六十圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千六十五圓は要りますぜ」

「それは君に一任する。出來るだけ贅澤にやつてくれ給へ」

「贅澤にやるとなると、一人前三千七十

臺灣日日新報
昭和十五年一月二十三日（火曜日）
（明治卅一年五月九日第三種郵便物認可）
（第二版）

臺灣日日新報

本日夕刊共十二頁
臺北市佐久間町一丁目一番地
社報新日日新報社
電話代表九八〇二番
編輯局一〇五二番
營業局一〇五三番
定価一ヶ月金四圓五拾錢（前金）
廣告料一行金壹圓
記事料一行金壹圓貳拾錢

錢塘江渡河を敢行

我精銳、敗敵を急追中

【杭州二十二日發同盟】わが精銳○○、○○、○○の各部隊は二十一日午後六時突如行動を起し民國の殲滅點を目指して敵前進二十二日午前零時方面の錢塘江渡河點を敢行、瞬間の中に敵の防衛線を突破して敵を壓倒する敵の包圍を脫れ前八時半頃までに渡河に成功し間髪を容れず敵を急追猛進中である。

要衝○○を占領

敗敵を急追して

【杭州二十二日發同盟】錢塘江敵前渡河に成功した我、高原の各部隊は間つく間もなく敗敵を急追、正午早くも敵據點○○の要衝を占領した

完全に奇襲渡河に成功

【杭州二十二日發同盟】今回我精銳各部隊に依つて敢行された錢塘江渡河作戰は上海、杭州間及び海杭線一帶の所謂三百餘哩の抵抗線に二發を加へ、抵抗の脆弱を醜さんとするものであるが今や作方面を利用し降りしきる白雪を踏んで行動を開始し、二十一日午前零時三十分を期し一齊の砲擊に對し完全に奇襲、渡河に成功し早くも同九時我精銳を渡つて○○線に進出せり

蔣政權には一大打撃

【杭州二十二日發同盟】昭和十二年十一月二十四日杭州灣上陸の柳川部隊に依つて敢行された錢塘江渡河作戰は上海、杭州間及び海杭線一帶の所謂三百餘哩の抵抗線を撃砕、軍旗にある交戰國人士中立國船舶よりも熾望することが出來ると主張、更に第一次世界大戰當時の前例を擧に取り右條文を援用解釋して十八歳より五十歳に至る徴兵適齢者は、悉く敵國人の對

支那民衆も祝福

【杭州二十二日發同盟】昭和十二年十一月二十四日杭州灣上陸の柳川部隊に依つて杭州を占領して以來敵の所謂天險の城隍たる錢塘江を境として彼我對峙約二ケ年餘、幾度なる抵抗突破作戰を敢行、遂に敵の所謂天險の錢塘江渡河に成功、敵の背後を衝くや敵は戰意を喪失、潰走に潰走を重ね、我精銳各部隊は敵の退路を遮斷、或は敵を包圍殲滅し、或は敵を追撃、或は敵を捕捉し、或は敵を降伏せしめ、或は敵を武裝解除し、或は敵の武器彈藥を鹵獲し、或は敵の軍用品を押收し、或は敵の軍用資材を燒却し、或は敵の軍用施設を破壞し、或は敵の軍用通信を遮斷し、或は敵の軍用交通を杜絶し、或は敵の軍用車輛を奪取し、或は敵の軍用船舶を捕獲し、或は敵の軍用飛行機を撃墜し、或は敵の軍用倉庫を燒却し、或は敵の軍用鐵道を破壞し、或は敵の軍用橋梁を爆破し、或は敵の軍用道路を破壞し、或は敵の軍用電線を切斷し、或は敵の軍用電柱を倒壞し、或は敵の軍用電話を不通とし、或は敵の軍用無線を破壞し、或は敵の軍用燈臺を破壞し、或は敵の軍用信號を破壞し、或は敵の軍用標識を破壞し、或は敵の軍用地圖を押收し、或は敵の軍用書類を押收し、或は敵の軍用金庫を押收し、或は敵の軍用貨幣を押收し、或は敵の軍用物資を押收し、或は敵の軍用食糧を押收し、或は敵の軍用被服を押收し、或は敵の軍用兵器を押收し、或は敵の軍用彈藥を押收し、或は敵の軍用資材を押收し、或は敵の軍用施設を押收し、或は敵の軍用通信を押收し、或は敵の軍用交通を押收し、或は敵の軍用車輛を押收し、或は敵の軍用船舶を押收し、或は敵の軍用飛行機を押收し、或は敵の軍用倉庫

社說

"青島會談"と蔣の運命

行政院長の辭職は意味深長

一

防共親日を標榜する新政權の誕生は、既に時日の問題であり、その時期も既々として間隔されて來た。そこで其の基礎となる汪精衛、王克敏、梁鴻志三巨頭の所謂靑島會談が、愈よ二十三日から開催されることになつた次第だ。此の會談に對しては既に各般の憶測が全く絶え、目下さゝやかな所ところの關心事となつてゐるが、其の會談の内容は、果して如何なるものであるか、又如何なる結果を齎すであらうか、更に又如何なる影響を我が國民政府の將來に與へるであらうか、等々の點に就いては、未だ何人も知る者がない。

二

然るに此の靑島會談の開催に先だつて、蔣介石氏が國民政府行政院長の職を辭し、孔祥熙氏が之に代つて行政院長に就任したとの報道は、實に意味深長なものがある。蔣氏は從來、國民政府の最高指導者として、國民政府の存在を一身に代表し、國民政府の存在は蔣氏の存在であり、蔣氏の存在は國民政府の存在であるとまで言はれてゐた程である。從つて蔣氏の國民政府に於ける地位は、實に絶對的なものがあつたのである。

然るに今回蔣氏が行政院長の職を辭したことは、從來の蔣氏の地位に比べて、一段の低下を意味するものであり、從つて國民政府の權威も、從來に比べて一段の低下を免れないものがあるであらう。

三

一方我が臺灣の住民は、從々國民政府の發展を喜び、國民政府の强化を歡迎して來たのであるが、今回の蔣氏の辭職は、從來の國民政府の發展に對して、一種の不安を感ずるものがあるであらう。

バルカン諸國は共同戰線を結成

羅ユ兩國の外相が豫備會談

ロンドン二十一日發特約電報】ベルグラードから當地に達した情報によると來る二月二、三の兩日ベルグラードに於て開催されるバルカン諸國會議を前に二十日マルコヴツチ、ユーゴー外相とガフエンコ羅外相は兩國々境に近い鐵道テメスバルで豫備會談を行つた結果、兩外相はソ聯の壓下狀況に對するバルカン諸國間共同戰線結成方針について協定を行ひ、最後までバルカン諸國は中立政策を堅持すべき點を再確認したるものと見られ、一方又右會談に於てドイツ、イタリー其他の對外關係强化がバルカン諸國の外交政策に與へる影響を考慮し、殊にドイツの對ソ關係に注目し、ドイツはソ聯、イタリーに對しこゝに二つの選擇を行はざるを得ないものと見られる。

英汽船が沈沒【アムステルダム二十一日發同盟】二十一日獨に達した情報に依れば、英國タンカー鮑カニー・リバー號（七、八〇七噸）は二十一日英國西部海岸に於て機雷に觸れ沈沒したと云はれる、同船は英海軍省の發表を受けて改造、新船發表と共に使用せんとしたものである

伊汽船が謎の火災【ニューヨーク二十一日發特約電報】ヘルシンキ發、ソ聯放送は、ソ聯汽船ウラル號は十一日スペインの東北海岸で謎の火災を起したがその船客六百名と乘組員は無事救助された

マニラ市長はロドリゲス氏【マニラ本社特派員發】就任二日目當選マニラ市長アンソン氏は十二日午前十時市廳に出勤、就任の宣誓を行ひ、ロドリゲス氏を副市長に指名した

ソ聯の增援部隊東南戰線に到着

ボサダ氏は共産派の支持を得て當選したが、就任後一時間にして市長に就任した。年齡三十五年。就任に當つては市廳前廣場に於て就任式が擧行されたがアルサン內務局長を初め市內各團體代表者多數參列した。

氏は就任演說に於て、市政の一新に努力する旨を述べた。

日本の警察機構視察へ　マニラ市警察署長

【マニラ本社特派員發】ケソン大統領はマニラ市警察署長アントニオ・トーレス氏の滿洲國警察機構視察を許可した旨四日マラカニアンから發表された、同氏の外遊目的はマニラ警察機能の改善に資する爲各國警察組織の機能の調査研究にあるが、滿洲國訪問を終つた後は日本に於て警察機構を視察の後歸國の豫定であるが期間は約一箇月である、何氏は四年前マニラ市警察署長に任命されて今日に至つた功勞者であるが、又久しく日本留學の經驗を有し日本語の堪能者である

伊、ソに對する獨の關係は微妙

【パリ二十一日發特約電報】最近に於けるドイツの對ソ關係に關し、佛國輿論は、ドイツ、ソ兩國間に經濟關係の改善が見られ、ドイツ側の對ソ關係强化の意圖あるものと觀測し、ドイツ側の對ソ關係强化の意圖あるものと觀測し、ドイツ側の對ソ關係强化の意圖あるものと觀測し

臺灣米增產に就て

臺北帝大助教授　磯永吉氏談

（四）

第三には種付密度を適正にすることであります、籾の種付密度に就て申しますと一定面積内の籾の數は多くなりますが穗の長さは短くなります、從し分蘗の增加數が穗長の低下率の一倍位であります から、適當に植ると收量を增すことになります、と云つて無闇に密植してよいと云ふのではありません自ら北限があります

◇…本島の現狀　は前項に述べた通り方が多いので所謂る地方に依つて異るのであります、大體標準として大なる誤りはないのであります、標準苗の取扱を慥實に行ふのみで二千八百乃至三千圓の增收を期し得ると信じます

◇…米增產計畫　は次表の通りであります

品分	一〇箇年後（昭和十二年）	一〇箇年後（昭和十二年）	一〇箇年後（昭和十二年）
收穫面積	甲	乙	丙
收穫高	甲	乙	丙
生產高	甲	乙	丙
移出高	甲	乙	丙
移出率	甲	乙	丙
備考	甲	乙	丙

◇…有效分蘗を　合せて十二本とし一穗六百十二粒の穗數を得、一升穗數三、六八〇粒となります、一升穗數三、〇〇〇粒とすれば一穗穗數二百八十八粒となります、在來種に於ても一穗穗數を十三本一穗七百二十八粒とすれば四、〇〇

激流

（承前）

久生十蘭作

伊勢良夫畫

(82)

四人の客 (九)

こちらが愛の表情を動かすことなく、相手だけを自分に服せようといふことは、むづかしさうでもあり、また容易くやれさうでもある。一見、平靜にしてゐるやうだが、その実、激しいところで互ひに烈しく渦を持つてゐて容易いとか、むつかしいとかいふことは、要するにこちらの愛情の程度にかかつてゐるやうに思はれる。

冬彦の場合は、夫人への愛の辛さから自分が解放される、その必要の程度の燃え込まが充すればいいわけで、別れさせるのはたいして重要なことではなかつた。

こちらが相手を愛してゐるのではなく、どういふ表情でも客観性を失ふことはないのだから、ほんたうの感情でぶつかつて行くよりも、やりやすい点、があつた。

醜せる技術といふものがあるわけではなく、所詮こちらが相手を愛してゐるやうなふりする「芝」しかないわけだが、成功するか成功しないかは、こちらがどこまで嘘を言ひ切れるかといふことにかかつてゐる。

冬彦は、きた星の間の小窓に立つて、低く呼吸いてみた。

「嘘をつく方なら、これでも相当なところまでやれるはずなんだが……」

本音のやうでもあり、強がりを言つてゐるやうでもあつた。

「どつこい、どつこい。さうむづかしく考へるな。……僕だつて、女の一人くらゐの翻こめないことはなさうだ。自らはつくれるには及ばないが、要するに、わけも道作もないことなんだ」

それにしても、何のためにこんなことをやらかさうといふのだらう？

この反動は、自分がまだ三度夫人を抱めきむすにゐる證拠だと思ひ、憤けない気持で、それを否定した。

「下世話では、これを面でて申します」

へゝん、とせせら笑つてみたが一向心が明立たなかつた。

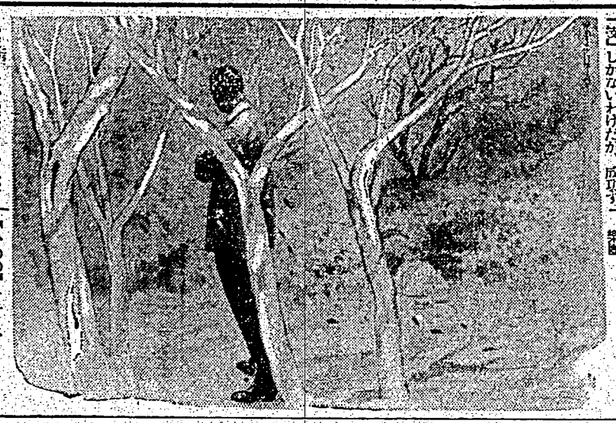
世界を敵にまわしてゐる木立の間からピアノの音が漏れてくる。シューベルトの即興曲だつた。

いつも最初切つて、留守番の妻や一人しかゐない義隊とした別荘の世界から、遠い彼方をうたつた十六歳を抜粋の精に憧憬した。

歌の歌のやうな軽々とした感情が流れ出してくる。ちやうど果物だつた。

いつもなら心が浮きつにすのところが、反対に、ひどく白々とした気持になつた。

自分の今の感覚とした感情にはピアノの音などはいかにもうるさく、イライラと気持が悪立つてきてさういふ平和な世界にシューベルトなどを奏いてゐる彼等を（挿）



ラヂオ十

組織変更(各局)

【〇・一〇】昔間娯楽時間（レコード）落語漫談、四城、羽衣・資生新

【〇・四〇】ニュース

【〇・五〇】國語講座及講演（中等科第四十二課）（淺井盛次郎）（名古屋中央公井戸哲人

【一・〇〇】ニュース

【一・一〇】ラヂオ體操

【一・二〇】報時（名古屋）・ニュース

【四・〇〇】放送の時間（名古屋）・學校放送講座（九州放送局）・お伽噺（第二十六回）（紙芝居）・桃山浦次

【四・二〇】番組紹介・相撲放送（十三日目）（東京）（東京相撲ヘ放送節ゝより中継）（但し時間放送には中断す）

【四・三〇】ニュース

【五・五五】コドモのニュース（名古屋）・淺北・市民時小（四年）・田畑美佳子

【六・〇〇】子供の時間（名古屋）・放送劇（子供のテキスト第二十六回）・林一郎演出・菱馬・北山清次

【六・二〇】子供の新聞（東京）

【六・三五】國語講座ニュース（名古屋）・太田正孝氏の新資料と盆栽國の發・總督府博物館長山中樵

【六・五五】カレント・トピックス（東京）

夜

【七・〇〇】子供の時間（名古屋）・放送われらは日本人・古平慶春

【七・二〇】ニュース

【七・三〇】國民歌謡（大阪）・藤國歌の歌（十歳未満作詞・淺携善次作曲）・指導・長岡英明・合唱JOBK唱歌隊男聲部・指揮武澤武

【七・四〇】放送案内（七四〇―八三〇）一製文放送（七四〇―八三〇）・東京の共同制作・中日實業株式會社提供・國民歌謡・東京放送局・國民歌の時間・國民歌謡・東京放送局・東京中央放送局・（三）歌謡曲・（四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（六十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（七十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（八十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（九十九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一〇九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一一九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一二九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一三九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一四九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一五九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一六九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一七九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一八九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（一九九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二〇九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二一九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二二九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二三九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二四九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二五九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二六九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二七九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二八九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（二九九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三〇九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三一九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三二九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三三九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三四九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三五九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三六九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三七九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三八九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（三九九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四〇九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四一九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四二九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四三九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四四九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四五九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四六九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四七九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四八九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（四九九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五〇九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五一九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五二九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五三九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五四九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五五九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五六九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五七九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八〇）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八一）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八二）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八三）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八四）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八五）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八六）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八七）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八八）歌謡曲（東京）・東京中央放送局・（五八九）歌謡曲（東京）・東京中央放送局

閃く！傳家の寶刀

セメント事件を楔機に惡質な時局犯に鐵槌

【台南電話】時艱克服の大セメント事件として時局下法網を潜つて大胆りな闇取引をなし莫大な暴利を貪つてゐた台南市飛田一ノ二一ロ井桃木店主は當局の手を逃れた儘早くも身の危險を感じ内地に飛んだが二十二日俄かに觀念して歸臺するので蕉陳水署に手配を依頼した所が同署では本件の取扱人公の容場により同店主の取調べを進めて來た

☆隨筆☆

やっちゃん戰死

森岡八千代さんの靈にささぐ

（上）

濱田隼雄

新學期の始業式が終つてまもなく戰死であつた。戰死狀況がかきものをしてゐると、松枝さんがやつてきて「新聞の訃報さんが見えました」といふので、八千代さんが應接からかへつたのかと思つて立ち上つたら、お母さんだつた。そしてコートを脫いで、僕の前に立つと、いきなり涙になつて「先生、やつちやんが、戰死しました。」と、倒れるやうに椅子に坐つてしまつた。

僕はあつけにとられて、泣き崩れたお母さんの顏をみつめた。

さういへば、四日にいられる時から、お母さんはいつになく、きつい表情だつた。お母さんは、戰死の知らせを受けると、さうそく僕のところにきてよこしたのだつた。新聞から台北まで、バスの中や街の中を、こちらにころべてきた訃しみが、僕の膝から、同時に八千代さんの顏を思ひ出すと、もう餘へられなくなつてしまはれたのだつた。

僕はほんとにだしぬけのこの報に、膽がいつぱいになつて、しばらくは身をすてさせるばかりだつた。

八千代さんは、僕が教師になりたてのころの生徒で、今までずつと、妹のやうな親しさにあつたのである。去年もやうとうそつこう、應募にタイピストとしてでかける挨拶に、軍司令部にゐた僕を、わざわざ臺北から廻つて訪ねてきてくれた。やはり一月の十日前だつた。それからもう一年たつ。あの時は、現地の戰場に一立つ女性としての感激をかいて歸ると約束もし、歸つてきたら、良いお婿さんをさがしてあげよう、などと冗談さへ云つたのに、あらぬての様子は家内宛のまめな消息で知つてはゐたものの、一度とあふことをもできず、今かうして悲しい知らせをうけなければならぬことになつてしまつた。

去年の八月、僕がまだ兵隊であつたころ、現地で特務機關の仕事をしてゐられる軍人との縁が結ばれ、婚がかはつたことを知つてから、現地での新家庭はどんなだらうとたのしみながら、美しい幸福を祈りあげるやうにと、かげながら祈つてゐたのだつた。お母さんのお話によると、十二月に、二人そろつて休暇のために新竹にかへつたと思ふ間もなく、夫君が出發よびかへされ、正月をこつちで過す豫定だつた八千代さんまで、やはり應召で、すぐ後を追つてゆかれたとのこと、何も知らぬ御兩親が現地での、しかも初めてのお正月を、二人でどうしてゐるかしら、などと樂しんでゐる矢先に、二十一日の朝刊が來て、二人一緒に戰死したとの公報があつたのださうである。

八千代さんは、臺南で國語傳習所の先生をしてゐた縁があるので、自ら進んで土民に日本語を教へたり、夫君の仕事を助け、樂しい團欒をしてゐたさうである。そして、ほんとに夢ぬ時は二人一緒だと、笑ひながら云つてゐたさ

(第三種郵便物認可)　昭和十五年一月二十三日（火曜日）　臺灣日日新報　第一万四千三百十七號　(七)

大和號使命果して歸航の途臺北へ

伊太利で大歡迎を受く

訪伊親善飛行を完成した大日本航空「大和」號は二十二日午後零時出發豫定來賓のため數時間延期せられたが、愈々午前十時二十七分ローマ飛行場を離陸、一路臺北へ向つた。

午前十時二十七分ローマ飛行場を離陸、一路臺北へ向つた。

大和號きのふ臺北飛行場へ（上）は佐伯機長一行の記念撮影（下）は佐伯機長一行の歡迎

臺北州の木炭增産

十五年度から積極的に乘り出す

木炭の需給は年々逼迫がきびしさを增へられてゐる折柄臺北州では積極的に木炭增産にのり出す事となり十五年度に木炭增産奬勵費として一万八千八百円を計上した、これは各市郡に補助金として按分交出し直接業者に改良設備を施設させるもので官有林原野の拂下げも希望に副ふべく万全の施設を講へてゐる、ただ臺北州内の他州とは異り纔少面及び交通の便を缺く山地業者なく殆んどが平地業者なので果して當局の考へる程顯著

今朝東京へ

二十二日夜行機で

二十二日夜行機で臺北飛行場發「大和」號にはニ十三日午前中に東京へ向つて飛び立つ豫定

臺北州で靑年道場

新年度から建設に着手

臺北州では多年懸案の州の青年修練所、所謂青年道場の建設が十五年度豫算に編成されたので昭和十五年度より愈々臺北州下青年團代表者百名を一ヶ月間收容して徹底的に皇國精神の昂揚と實踐力の涵養を圖るのである

自分の負傷も顧みず

彈雨下・戰友を手當

吉田衛生上等兵の旺盛な軍人精神

委員は廿名

臺北州地方物價委員決る

左黨の受難

ビールに自肅的二割の減石

古綿の盜賊橫行

時局が生んだ珍なる犯罪

警察署では躍起の警戒

新竹州會開かる

初日から熱心な質疑應答

戰時下の犯罪

統計に現れた本島の特異性

臺灣事情に御熱心

秩父宮殿下臺灣館を御巡覽

歐洲を見て始めて日本の幸福を知る

笹川使節の土產談

臺北州で靑年道場

新年度から建設に着手

臺灣米穀移出商組合

清算事務所　電話二七七六番

東西兩大關敗る

西軍奮戰四點をリード

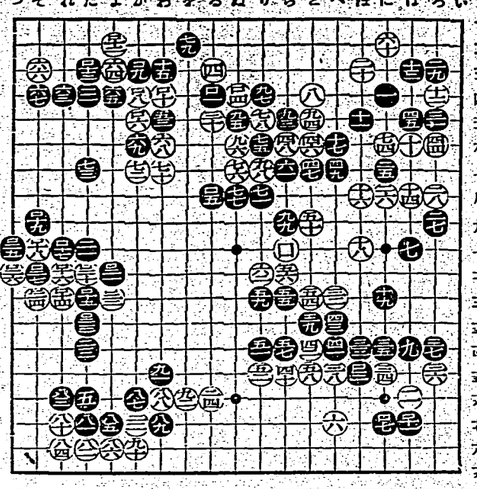
立上るや右四つ、組止手下手十分腰をひねつて呉の右上手

栃甲に飛込んで押さんとするを出羽嶽早く右から左の双差筋つてあつけなく出羽嶽の勝

國（呉服）五ツ　島　開始の一番　激しい突合ひから五ツ島のど輪に攻めたが照國殘して突放すと再度押いたが振りず突合ひとなつたが照國敢然飛込んで右差、左の鯖折を引付けて寄れば五ツ得意の掬投しを見せたが照國二枚腰に殘そのまま寄止面へ寄切つて出は大相撲であつた

安藝ノ海（小野川）黒　山　これ又最初の好取組、立上るやガップリ左四つから安藝猛烈に寄れば羽黒寄返し此の態勢から安藝投を見て右の前褌を引付けて押下るを羽黒行から再度引落したのが巧く、安藝たたりとを捻きかへして双差しから一気に黒星へ寄立て、羽黒が九死に入つて踏み止め振りも一生懸命に寄倒して安藝の勝

出羽嶽（春日野）栃　田　山　立上るや右四つ、組止手下手十分腰をひねつて呉の右上手

小島川（下手投）岩　入　後　組止手投後、一ノ渡（常陸谷）九ヶ嶽（出し）藤ノ濱（常陸川）一ノ里（常陸谷）大和嶽（寄切り）巴潟（常陸山）寄切り）冨士嶽（東）玉ノ海（上手投）肥州山（出し）藤ノ里（常陸谷）旭川（常陸山）大ノ里（常陸山）綱ヶ嶽（小手投）羽黒山（洋）波（寄切り）佐賀ノ花（四海山）寄切り）松浦潟（出し）金剛（常陸山）若櫻（出し）若葉山（常陸山）相模川（常陸山）寄切り）天龍（常陸山）寄切り）名寄岩（春日野）栃甲

表取星撰相大所場春